資料-3

「山古志　復興新ビジョン研究会」第１回生活再生分科会

「復興新ビジョンにおける分科会方針の検討」の主な意見

1.復興新ビジョンについて

・復興新ビジョンの基本方向に「周辺地域との協調、共栄、競争」を謳いたい。
・生活再生分科会の方針に、精神、食糧、エネルギー、インフラなど総合的に見た「自立」を入れたい。
・基本方向にある仮設住宅による帰村から再移転のケースは良い方法だが、暮らしていけるかが課題であり、自給自足をどう支援するかをセットで考える必要がある。
・復興ビジョンの基本方向が自己完結型すぎるのではないか。もっと外との接点を持つ必要がある。山古志の人だけではなく、外から参入できると思えるビジョンとなるかがポイントである。
・道が通って人が戻ってきただけでは、中山間地の問題が繰り返されるだろう。子育て世代、食い扶持世代、あるいは竹沢のように家を失った人々など、ターゲットにすべき世代・対象を分けて考えるべきである。
・集落別に年齢別人口をシミュレーションして、メニューを考えていく必要がある。

○　復興ビジョンの基本方向に周辺地域との関係性について言及し、村外との連携を意識したものとする。
○　世代別、集落別などターゲットにすべき対象を分けて復興計画を考えていく。

2.生活・産業について

１）農業関連

・崩壊した棚田を国・県に購入してもらい、その資金をレンタル農地など復興事業に使うといったことも考えられる。
・共同営農は採算が合うかどうか、農業だけで若い人がくるかどうかが問題である。農産物の加工品なら採算性があるかもしれない。
・中山間地での共同営農はこれまでうまくいかなかった。バイオマスなどの企業化の方向で進むことが必要である。
・これからの山古志を考えると、生業としての農業はないのではないかとも思う。棚田を風景として捉え、観光から棚田の維持費が出てくるようにする。アマンリゾートが参考になるのではないか。

２）産業関連

・生活再生と産業の関連で言えば、ツーリズムについては山古志と外部の視点から３段階あると思う。

①リストレーションツーリズム（復興ツーリズム）

内部のオーナー、外部のボランティアによる田作り

②エデュケーショナルツーリズム

子供たちの参加

③グリーンツーリズム（農家への滞在など）

・山古志には、カブなど特有の野菜がある。これをビジネス化すれば若い人もなんとかやっていけるのではないか。地域の資源を洗い出してメニューを整理してはどうか。

・養鯉を他人に教え、認定制度などを設け、交流人口を増やすことも考えられる。

・新エネルギーは処理に非常に困っているものが資源となる。例えば毎年３ｍも積もる雪を雪氷冷熱エネルギーの資源として活かすなど、頭を切り換えることが重要である。

３）公共施設関連

・公共施設整備のうち学校・保育所は、同じ場所に作りたい。朝はスクールバスが走り、その後は高齢者を乗せて走るなど、村の中枢部では人がにぎわう環境にしたい。

・「道の駅」など核となる場所や施設とのリンクをどうするかが重要である。

・農水省では１７年度より宿泊型の「村の駅」事業をスタートするので検討する必要がある。

○　地域資源を洗い出しし、挙げられたアイディアのメニュー化を検討する。

3.村民の帰村について

・帰村には山古志人に戻るリハビリテーションが必要である。いまの仮設住宅の生活では、山古志らしい気骨や人のつながりなども弱くなっていると思う。山古志の「自立」と「復興」のためには、帰村前にやる気を引き出すようなケアが非常に重要なポイントになる。

・長岡で住み続けると、全村帰村はむずかしくなる。帰れる人が帰り、自分の生活は自分で守る姿勢が必要になる。実際に戻る時、辞退する人がでるかもしれない。

別紙

「山古志　復興新ビジョン研究会」第１回産業・経済再生分科会

「復興新ビジョンにおける分科会方針の検討」の主な意見

1.復興新ビジョンについて

・山古志の生業についてはビジョンでメニューを示す。その中から生活のプロである住民が自分で考えて、できそうなことに手を挙げるということになるのではないか。
・世代によっては帰村に対する思いがかなり違ってきている。また、生業とする産業ごとに温度差がかなりある。収入の目途が立っている人たちと見通しが立たない人の違いを把握してビジョンを考える必要がある。
・山古志の場合、産業の復興は集落ごとに分けて考えざるを得ないと思う。集落ごとの産業の現状を把握したうえで、ビジョンを考える必要があるのではないか。
・きめ細かいプランは山古志の人たちをダメにするのではないか。お節介を焼きすぎずに、山古志の人たちの自立心を支援する感覚が必要ではないか。研究会では環境や場を提供するにとどめ、それを選ぶか選ばないかは山古志のみなさんに判断してもらうのがよい。
・8 割～9 割の人が帰村することを前提に考えるのは無理がある。戻る人が半分になっても、山村として生き延びていけるビジョンを示すのがいいのではないか。
・復興のカギは、交流である。

○産業・経済再生分科会における復興新ビジョンでは、あくまでも村民の自立支援することを念頭に置き、生業とする産業などはメニュー化することを検討する。

2.産業・経済について

・観光をさらに打ち出すのが産業復興の基本的な方針だと思う。そのためには鯉も棚田も維持する必要がある。個人で農業をされている方が多いが、この機会に法人や組合といった形態に移行してはどうか。
・農業と養鯉、闘牛、風景、人を組み合わせ、人に来ていただく新たな産業を提案し、やる気のある方にまずは自力でやっていただく。支援が必要であれが国や県が支援するというのがよいのではないか。
・山古志は 40 年くらい前の日本の原風景を残しうる地域として、文化的な側面からも維持していく方向が良いと思う。山古志村に関する歴史的資料を集約すれば、日本の中山間地の歴史とふるさとをテーマとるミュージアムができると考えている。
・教育や防災関係者の学習施設にもなりうる震災復興メモリアルの建設などが考えられる。闘牛や農業に加えてそれらも生業にしてもらってはどうか。
・山古志には日本の原風景がありいいところだが、すべての地区がそうではない。観光に適しているところはそのまま保護し、それ以外の地域は IT や除雪等の最新技術などで住みやすい場所にしていく。

そのような環境のギャップを上手くネットワークで繋げれば、観光客にも来てもらえるのではないか。
・光り輝く山古志の実現のためにも、中越地域の発展のためにも、周辺市町村とのリンケージが必要である。ＪＲの動向も把握する必要がある。
・ルートの中に山古志を組み込んで、山古志にお金を落としてもらう仕組みが必要ではないか。若い人の定着を促すためには収入の道がないと難しい。
・山古志は癒しの空間として活用できると考えている。原風景として、県立公園の特定区域に指定するといった方法もあるのではないか。
・被災地を観光資源とした台湾地震での復興は参考になり、人材育成の面でも台湾とのつながりは強化していくべきである。
・自分たちの良さに自分たちで気づくことが大事である。また、良さに気づき、それを行動に移せる人材を育てることが大切。人材を育てるための基金をつくってもよいのではないか。
・長期的に農業のあり方を考えてもらうためには、まず村民にアジアを含め外遊をしてもらい周りの状況を把握してもらうといった場を提供し、村民自身に理解してもらうことも重要ではないか。
・国内だけでなく、東アジアの中山間部も対象にした人づくり支援を行う。国際的に PR し評価されることで、山古志の人々も自信が湧くのではないか。

○　棚田、錦鯉、闘牛など山古志の文化、産業を生かした観光産業の振興について検討する。
○　山古志の歴史や日本の中山間地をテーマとするミュージアムや防災関係者の学習施設にもなる震災復興メモリアルなど拠点施設の設置を検討する。
○　山古志村民の自立を支援するためにも、人材育成などの面からも復興計画を検討する。

3.住宅について

・仮設住宅を山古志の地区内に設置し、そこを起点として、現場を見てもらい自身で再建意志や安全性、社会基盤の整備を確認してもらう。このように、2, 3 年間の確認期間を経て自己リスクで住居を再建してもらうことが大事である。
・住宅再建は今後に大きな影響を及ぼす。メーカーの協力を仰いで、耐震構造のコンペを開催し、山古志でモデルハウスを作ってもらってはどうか。
・住宅展示会を山古志で行って、その後安く払い下げてもらうことは可能ではないか。
・当分科会では産業のあり方をまず議論し、産業活動を行う上でどのような住宅を整備して行くべきかを生活分科会に伝えるようにすべきではないか。

○早期の山古志村内の住宅確保に向けて、住宅メーカーの協力などを含めて、多様な方策を検討する。→住宅再建については生活分科会と調整する。

別紙

「山古志　復興新ビジョン研究会」第１回地域基盤再生分科会

「復興新ビジョンにおける分科会方針の検討」の主な意見

1.山古志の復旧状況について

１）芋川河道閉塞

・芋川については 5 箇所で河道閉塞が起こり、特に危険が大きいところは寺野地区と東竹沢地区の 2 箇所である。

・寺野地区においては１２月１９日に、東竹沢地区においては１２月２８日に融雪出水時の越流に耐えうるよう仮排水路を整備した。

・恒久対策は、排水路の敷高や上流の不安定土塊の検討も含めて行い、工期も排水路のレベルによって差が生じる。最終的な恒久対策は、今後「芋川河道閉塞検討委員会」で検討することとしている。

２）国道２９１号（村内道路含む）

・小千谷市小栗山地区から山古志村東竹沢地区地の間約 10ｋｍを直轄で行うこととしている。

・東山トンネルから竹沢までは、崩落箇所を除去して 11 月中旬には工事用車両や緊急車両が通れるように復旧した。竹沢地区から東竹沢地区の区間は、今年の春の雪解けを待ってすぐに本格復旧できるように工事用道路の整備を完了した。その区間のうち、竹沢から梶金集落の約 1㎞ 間は、道路全体が落ちて元の状態に戻せない状態であり、トンネルによるルートを検討している。東竹沢地区内の約３ｋｍは、芋川河道閉塞対策と調整してルートを決定する予定である。

・北陸地方整備局や新潟県、山古志村などの関係機関で構成する「山古志村道路復旧調整会議」において、国道、県道、村道の１級 2 級までを対象に、全体のネットワークの観点からも調整していく。

・復旧スケジュールは、基本的には 2 年を目標として計画している。

３）ライフライン、その他

・道路脇に広場をつくり物産を販売できる等の仕組みづくりについては、村長や商工会等の方々にもお話を伺って、民間主導で検討頂き、北陸地方整備局としてはバックアップしていきたい。

・上水道など様々な災害復旧の申請は雪解け後になる。当然道路の復旧にあわせて工事していく。

2.意見交換

1）復興新ビジョンについて

・現在の積雪下では被害実態が把握できないので、正確な事態は、融雪期まで待たないとつかめない。研究会は、時期を得たアドバイスを出さなくてはならないが、長期を見据えて、雪解け後に起こる状況も加味して議論しなくてはならない。

・山古志村では確かに全村一斉避難をしたが、帰る段階では個人の帰村への意欲を最大限尊重すべきではないか。一方で安全への課題はあるが各個人の力を活かすのが良いと思う。

2）集落再建について

・ハイブリット型（被災前に戻す復旧型と適地への集落移転を合わせた方式）の方向性を村が受け入れるかどうかが最大のポイントである。山古志村のような中山間地域で発生した震災では、背景となる文化の形成過程と歴史の長さが神戸の場合とは違うことなどを理解されるかが大きな前提条件である。

・全国の中山間地域復興のモデルを目指すなら、実現可能な方法を提示すのも大事である。コミュニティーを育てられるようなコンパクトシティーを形成するイメージではないか。

・復旧の見込みの差は場所ごとそれぞれあり、復旧の優先順位をつけざるを得ない。早くできるところ、時間の要すところ、場合によっては放棄せざるを得ないところがあるだろう。

・実際、帰村して、自分の棚田が無いとか水が引いてこられない、また水が溜まらないなどのトラブルが多く確認されることになるだろう。こうした状況に直面して初めて村民の意思がはっきり決断されるのではないか。

3）道路

・今後、仮にハイブリット型の復旧を目指すとしても、集落同士のコミュニケーションネットワークを結ばないとうまく進行しないだろうと思われる。

○山古志村内においては、集落毎の被害状況に差異があることから、集落再建の場所や復旧の優先順位の目安として、被災前後の空撮写真や地すべり状況図など既存資料から村内のハザードマップを作成する。